

氏 名 市 東 真 一
 学 位 の 種 類 博士（歴史民俗資料学）
 学 位 記 番 号 博甲第 262 号
 学位授与の日付 2020 年 3 月 31 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 学位論文の題目 熊谷うちわ祭の祭典組織の研究
 — 祭礼における権威と権力に注目して —

論文審査委員 主査 神奈川大学 教授 佐野賢治
 副査 神奈川大学 教授 小熊誠
 副査 神奈川大学 特任教授 昆政明
 副査 日本工業大学 教授 板橋春夫

【論文内容の要旨】

本論文は、埼玉県熊谷市の熊谷うちわ祭において、実際の活動を担っている鳶、旦那衆、若連の三者の身振り・動作、言動などに注目し、そこから、祭礼を構成するそれぞれの役割の発揮と調整、その集成として祭礼全体をまとめ上げていく意識の背景に「権威」や「権力」ともいうべき力学が働くことを論証し、従来の祭礼研究に対し、新たな視角を提示する。

本書はⅢ部 9 章構成を取り、章立ては以下の通りである。

序論

1 1 研究の目的と視点— “旦那を創る” ということ — 2 都市祭礼の視点 (1) 民俗学における祭り・祭礼研究 (2) 祭礼研究の多様な視点 3 本研究の対象と方法 (1) 研究対象と方法 (2) 本論の構成

第 I 部 熊谷うちわ祭の歴史と民俗

第 1 章 熊谷市と熊谷うちわ祭の概要

1 熊谷市の位置と歴史 2 熊谷愛宕八坂神社と祭礼の日程 3 各町内と祭典組織 (1) 1 2 か町と 8 か町 (2) 町内の役職 4 熊谷うちわ祭の歴史 (1) 江戸時代の祭礼 (2) 明治時代の祭礼 (3) 中断と復興 (4) 祭礼の発展と観光化

第 2 章 新聞にみる明治時代の熊谷うちわ祭

はじめに 1 熊谷うちわ祭の新聞記事 2 愛宕八坂神社の記述 おわりに

第 3 章 熊谷うちわ祭に関わる民俗事象

はじめに 1 熊谷うちわ祭の祇園柱 (1) 現在の祇園柱 (2) 古文書に見る祇園柱①江戸時代の記述②明治時代の祇園柱 (3) 資料に見る祇園柱 2 団扇の頒布と祭礼 (1) 現在頒布される団扇 (2) 資料にみる熊谷うちわ祭の団扇 (3) 頒布品としての団扇 3 鳶と総代の大山代参 (1) 熊谷うちわ祭の大山代参 (2) 熊谷の大山信仰 (3) 大山代参と町内の行事 (4) かつての大山代参 おわりに

第Ⅱ部 且那衆・鳶・若連の攻防

第4章 祭礼における熊谷鳶の変容

はじめに 1 鳶を巡る研究 (1) 職業としての鳶 (2) 祭礼の中の鳶 2 熊谷鳶の実像 (1) 熊谷うちわ祭の鳶 (2) 祭礼での活動 (3) その他の活動 3 かつての熊谷の町鳶たち (1) 防災と鳶 (2) 日常での雑務 4 熊谷うちわ祭の鳶たち (1) 仕事師から象徴的な鳶へ (2) 祭礼の役割としての鳶 おわりに

第5章 且那衆の権威の創造

はじめに 1 大総代と総代の役割と活動 (1) 大総代と総代の位置づけ (2) 大総代の活動 2 総代と且那衆の変 (1) お祭り且那の葛藤遷 (2) 資金源による祭礼の変化 3 伝統的な且那から比喩的な且那 (1) 人口の過疎化と総代の変遷へ (2) 祭礼の拡大と大総代誕生 (3) 他町内への意識 おわりに

第6章 若連の変容と拡大

はじめに 1 若連から祇園会への再構成 (1) 現在の祇園会 (2) 旧若連の人びと (3) 祇園会成立後の動向と役割の拡大 2 且那と鳶と若者たち 3 熊谷うちわ祭の若者組織 おわりに

第7章 関西圏の祭礼組織の内部構造—京都祇園祭船鉾町を事例に—

はじめに 1 京都祇園祭と船鉾町 (1) 京都八坂神社の祇園祭 (2) 船鉾町の歴史と船鉾 (3) 現在の祭典組織 2 大工方の活動 (1) 船鉾町の行事と作業 (2) 大工方の作業 おわりに

第Ⅲ部 祭礼の変容と祭典組織の動向

第8章 観光化による祭典組織の変化—千葉県成田市成田祇園祭を事例に—

はじめに 1 新勝寺と門前町の祇園祭 (1) 成田山新勝寺の門前町 (2) 成田山門前町の祇園祭 2 先鋒の役割と観客 (1) 先鋒という役割 (2) 先鋒の成立 3 成田祇園祭の観光化 おわりに

第9章 祭礼における外部的な権威—沼田まつりのマンドウを事例に—

はじめに 1 地域と祭礼の概観 (1) 祭典地域と神社の歴史 (2) 沼田まつりの歴史 2 マンドウの変遷 (1) 江戸時代のマンドウ (2) 明治時代のマンドウ (3) マンドウの転換期 おわりに

結論—祭礼における権威・権力という視点—

1 熊谷うちわ祭の中にみる鳶、且那衆、若連 (1) 且那と鳶との関係 (2) 権威を創る目的 (3) 大総代の創設 2 祭礼における権威付けと競争 (1) 観光化の影響 (2) 江戸型山車化と権威 3 都市祭礼の権威と権力という視点 (1) 視覚化される町内の権威と権力 (2) 外側の権威と権力

巻末に、付記、参考文献、初出一覧を付す。

序論では、本論文の研究目的、研究方法について述べる。民俗学では、村の氏神祭祀における氏子の運営による祭礼研究の蓄積は膨大である。柳田国男は『日本の祭』において、祭りの華麗化、風流化の中で、新たに祭りを見る者の存在を指摘した。観光資源として外在的視点からの現在の祭礼研究へ対する予見ともいえた。祭りはいったい誰のために行われるのか、氏子、村人、住民のためとは直ちに言えない今日、見る者も多く、華やかに挙行される、御霊系の祇園祭、都市祭礼の祭典組織に焦点を当てて、この課題に取り組み、現代社会における祭礼の意義を論じる立場を述べる。

第Ⅰ部熊谷の歴史と民俗では、うちわ祭の行われる埼玉県熊谷市の地理と歴史を概述した後、熊谷うちわ祭の現在における行事とその内容、日程と次第、祭典組織についてまず説明し、続いて江

戸時代からの歴史をさかのぼる。特に明治時代の祭りの実態については、当時の新聞記事を参照し、明治時代における祭日の変遷、当時の山車・屋台の様相、愛宕八坂神社について、今日との異同を明らかにした。また、新聞記事はじめ各種の史資料、聞き書きからうちわ祭りを特徴づける、祇園柱、団扇、祭りの締めとなる大山代参の起源と意味について考察を行った。

第Ⅱ部旦那衆・町鳶・祇園会の攻防では、まず、現在の祭礼における鳶、旦那衆、若連それぞれの役割に注目し、その役割の内容の変遷、存在意義について考察した。そこから、熊谷うちわ祭がどのような祭典組織によって運営されてきたのかを跡づけた。その結果、祭礼における旦那衆の権威とその行使は鳶との相互交渉によって生み出され、周知され、実行に移されていくことが明らかになった。この意味を比較検討するために、鳶に対照するものとして、京都祇園祭の船鉾町でその象徴、船鉾を保繕する作事三方の大工方を事例に、長年の歴史を有する上方の祇園系都市祭礼の内部構造について分析した。

第Ⅲ部祭礼の変容と祭典組織の動向では、千葉県成田市の成田祇園祭の「先鋒」、群馬県沼田市の沼田まつりの「マンドウ」と、人と物の動向を事例に、現代社会の祭礼において、観光化などの外在的要因に対して、その内的な対応を分析し、補説とした。成田祇園祭では、祭礼の観光化に伴い、先鋒と呼ばれる役職が誕生し、新勝寺との関係調整にあたり、沼田まつりでは、マンドウと称される山車の新造、華麗化に積極的に江戸型山車の形が導入された要因について考察を行った。

結論では、熊谷うちわ祭において鳶により言われる“旦那を創る”という言葉とその相互性を表す最もふさわしい言葉が「権威」、その行使が「権力」ということを、祭礼の次第における鳶、旦那衆、若連の三者の具体的な動作、言動などから指摘し、現代社会の祭礼研究における分析視角としての有効性を論じた。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の持つ大きな意義は、従来、村社会の氏神祭祀の分析を中心に展開し、いまだにそのくびきから脱しきれていない民俗学における祭礼研究に対し、観光化した祇園系の都市祭礼、「熊谷うちわ祭」を事例にして、現代における祭礼が「一体だれのためのものであるか」を論じたことにある。具体的に、実際にこの祭りを担っている鳶、旦那衆、若連の三者の行動や言動に取材し、それぞれが役割を果たしつつ、祭礼全体が統合されていく基調に、「権威」や「権力」ともいうべき力の発動が認められることを指摘し、この分析視角が現代社会の祭礼研究に有効であることを論証したことである。祭礼の次第や祭事の芸能の詳細な記述に基づく静態的な祭礼民俗誌的研究ではなく、祭礼がなぜ行われ人々を引き付けるのか、その躍動の源を、祭りを主宰する側の動態、内的な力関係に見出した点に筆者の独自性を認め、また新たな祭礼研究へ取組む意欲の表れとして評価できるものである。

また、本論文は、祭礼の民俗誌としても、その調査、記述に評価できる点がある。その一は、現地調査では自らが祭礼関係者の一員となって、当事者の心意により近い参与観察の視点で物を見、また聞き書きをしたことで、熊谷うちわ祭、京都祇園祭りの鳶や大工さんの記述に活かされ、反映されている。その二として、新聞記事を、まさに時系列における時点が特定できる歴史民俗資料として有効に活用した点も高く評価できる。熊谷鳶の時代による性格の変遷の記述は、詳細な職人研究資料として後世に残された。

その一方、さらに説明、論じて欲しい箇所やいくつかの課題が求められる。最も補説が欲しいのは、「権威」と「権力」の語用についてである。この語については、M.ウェー

バーはじめ社会思想史の研究史上でも多くの蓄積があり、またさまざまな見解が示されてきており十分な配慮が求められる。日本社会論においても、「権威」を天皇制に認め、「権力」を幕府に認める考えや、民俗文化論においても折口信夫の学説などがあり、本論のキー・タームでもあることから、学説史を消化したうえでの、自身の定義が必要となる。

熊谷うちわ祭の民俗誌記述については先に評価したが、大規模な都市祭礼の場合、それぞれの行事の進行状況が総合的にわかる総譜（スコア）のような表や図があればより理解がはかれる。また、祭りを特長づける祇園柱とうちわについては、柱の垂直性は天と地を結ぶ象徴とか、より素朴な、基本的な説明から始めるも説得的であろう。本論は、祭典組織に焦点を当てたため、写真の掲載などに助けられたが、祭りの全体がイメージできないきらいがあった。

以上、本論文は、今後さらに補い、深化させるべき課題もあるが、熊谷うちわ祭を事例に、現代社会における観光化した都市祭礼を滞りなく執行していく上で、かつての村祭りの氏子組織に見られるような既成の関係、組織ではなく、それぞれの状況と場面に応じて、「権威」とか「権力」ともいうべき力が発揮され、祭り全体が統括されていくことを見事に論述している。論証に当たっては、当事者に対する聞き書きをはじめ、自らの参与観察、また新聞記事を有効に利用するなど、新たな試みもなされている。いずれにせよ、本論文は、見るものを意識した現代社会の祭礼において、「祭りはだれのためのものか」の問いかけに対し、祭礼を挙げる側の組織に内在する原理を「権威」と「権力」の言葉を使いつつ具体的に提示した意欲的な論考といえる。また、口頭試問において今後の展望など著者にさらなる質問も試みたがいずれも相応しい応答であった。その結果も合わせ、市東真一氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することがふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。